

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Effects of physical activity during pregnancy on preterm delivery and mode of delivery: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 妊娠前及び妊娠中の身体活動が、分娩週数と分娩方法に及ぼす影響(エコチル調査より)

ユニットセンター(UC)等名: 神奈川UC

サブユニットセンター(SUC)名: 富山UC

発表雑誌名: PLOS ONE

年: 2018 月: 10 巻: 13 頁: e0206160

筆頭著者名: 高見 美緒

所属UC名: 神奈川UC

目的:

本研究では約10万人という多数の日本人の妊婦を対象に、妊娠前及び妊娠中の身体活動/運動習慣が、妊娠分娩転帰、主に分娩週数(早産か否か)と分娩方法(経膈分娩、帝王切開分娩、器械分娩)にどのように関与するかを調査することを目的とした。

方法:

本研究はエコチル調査で得られたデータを基に行った。92,796例の妊婦を対象に、質問票から妊娠前および妊娠中の身体活動量を算出した。その身体活動量を4分位でグループ分けを行い Very low群、Low群、Medium群、High群と分類し、4群間で妊娠分娩転帰を比較検討した。多変量ロジスティック回帰分析にあてはめオッズ比を算出し、尤度比検定により変数の寄与率を推定した。

結果:

妊娠中の身体活動量がMedium群に比して、Very low群では早産と器械分娩の頻度が高かった(オッズ比OR 1.16, 95% 信頼区間CI 1.05-1.29, OR 1.12, 95% CI 1.03-1.22)。Medium群に比してLow群で帝王切開率が高く、High群で器械分娩率が高かった(OR 1.07, 95% CI 1.00-1.15, OR 1.12, 95% CI 1.02-1.22)。一方妊娠前の身体活動量によって早産率も帝王切開率も4群間で有意差を認めなかった。

考察:(研究の限界を含める)

本検討では妊娠中の身体活動量の低下が早産のリスクとなることが示唆され、適度な運動は早産を上昇させないという従来の見解を追従した。また妊娠中の身体活動量の低下が帝王切開分娩のリスクをわずかに上昇することが示唆され、適度な運動は帝王切開分娩のリスクを減らすという従来の見解を追従した。本研究の長所は①約10万人の大規模コホート研究であり、②日常の全ての身体活動を評価でき、③共変量が多数であることである。限界は身体活動量の評価の点(質問票の回答が主観的、妊娠全期間ではなく限定された期間での回答、質問票の回答が一部は不完全)である。

結論:

妊娠前の身体活動は早産や帝王切開分娩に影響を及ぼさなかった。一方で妊娠中の身体活動はそれらに影響し、特に妊娠中の身体活動量の低下は早産および帝王切開や器械分娩のリスクをわずかに上昇させた。